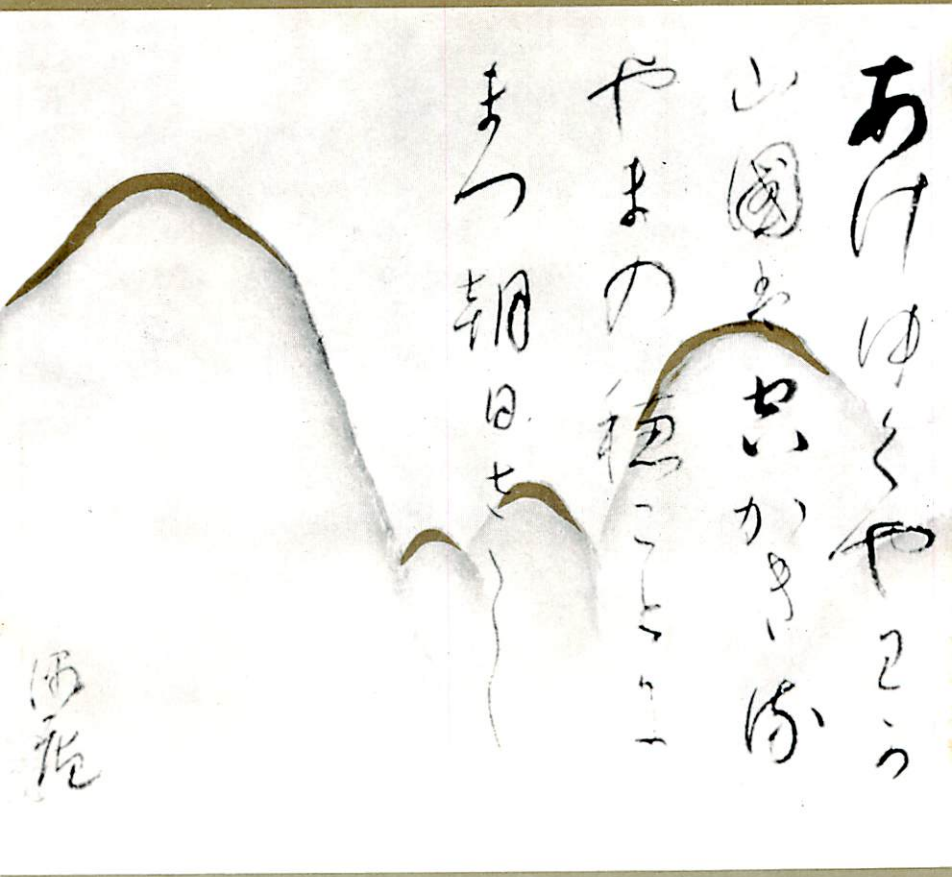
G.R.
白雲郷

とりみ



17

昭和46年1月1日

新年御芽出とう存じます

□大ニュース…一昨年はゲバ捧、昨年は各種洪害、併し対策は**ゴテ、ゴテ**で又尾を引くでしょう。
本年は何……成金の日本は東洋の盟主として責任を持たされ、且つ復雑微妙な国際、国内状勢に翻弄されて、破乱多い年と思います。
何卒、今年は明るく、住みよい日本にするため、冷静に之を見守り、正しい世論に導くよう、御努力願います。

□表紙は、川合玉堂画伯の画です。

あけゆくや、わが山国は　空かぎる
山の穂ごとに、まづ朝日さし

この表紙を見ていると、私がダージリンのタイガーヒル聖台で拝んだヒマラヤ連峰の御来迎を連想いたします。画伯も定めし清澄な奥多摩の峰々にあかねさす新春の崇高な朝日の美くしさに、心打たれたものでありましょう。

目　　次

○表　　紙……御来迎……川合玉堂画伯
○十年間の初詣……1頁
○印度附近の旅路（その七）……桐　　江　5頁
○西　遊　記（その十二）……岡部千三　11頁
○壱万体観音奉納者芳名……16頁
○壱万体観音奉安申込用紙……20頁
○納経式と三十周年記念祭……21頁
○謹賀新年役員芳名……23頁
○春の行事のお知らせ……24頁

私は子供が四人ですが、多忙のため家族団欒の機会が少ないので、正月には家族連れ立って神仏詣りを十年間続けました。

何しろ四十数年前の事ですし日記もありません。又子供がおぼえているのは、苦しかった事、叱られた事、食べ物の事以外は思い出せない様です。

第一回　昭和三年　正月三日　日帰り　高水山

（正月二日は仕事始めなので、三日から出発しました）

私は三十五才、妻とみ三十一才、長男邦彦十一才、長女さつき九才、次男康彦七才、次女まりえ六才。

小沢峠を越えて、高水山に往復三里余の山道です。

小沢峠の入口の橋の所に、小さな祠がありまして、この橋をくぐると、ハシカが軽いと云うので、皆くぐりました。

「いとし子の、ハシカ軽きを祈りつつ

小沢の橋を、皆くぐりけり」

高水神社の神前では親は子供等が、すこやかに育つよう、又、家内安全等慾ばった祈願をしますが、子供等は板の間にぬかづき、寒さをこらえて神妙に頭を下げている、無心の姿にこそ、却って神の守りがあるように思いました。私は坂道を登る時や、帰路、ねむくなった子供を、ぶらさげて歩く位元気で子供も小さかったのです。

第二回　昭和五年　日帰り　高尾山等

家族六人ですが子供が小さいので、自動車一台で丁度よかったのです。拝島神社、多摩御陵を拝して、ケーブルで高尾神社に詣り、社殿にてお祓いをして頂いてから、鬱蒼たる樹木の間を、雪を食べつつ登り十三州を眺められる見晴台等見物して下山、午後四時、村山貯水池の食堂で昼食をしたのですが、待つ間の永かった事、ランチを夢中で平らげて、やっとお腹がすいていたのに気がついた、と大笑いしました。帰りは車中歌をうたいつづけた愉快な旅行でした。

第三回　昭和六年　一泊三峰神社等

湯ノ沢迄自動車で行き、山伏峠の雪深い中を約一里

歩いて、芦ヶ久保の役場の所迄、迎えに来る様に、電話で頼んでおいた自動車で、三峰山麓迄行き、雪深い五十三町の急坂を登るので、厳寒乍ら暑い暑いと子供が云い出したので、「冬の最中、暑いとはぜいたくだ」と云うと「寒いの反対、寒いの反対」と子供らは云いつつ登りまして、社殿で御祓いをして頂き、三ノ膳つきの食事や、宝物殿等、鄭重な接待は有難かったのですが、其の為、冬の日は短く、五十三町の急坂を暗夜、お互に声をかけ、はげましながら下りました。幸い、雪の明るさが頼りになり、山麓で人員点呼をして、ほつとしました。併し自動車の中では靴がぐっしょりぬれていた為、足が切れそうにつめたく、宿についても中々寒くて寝られませんでした。所が其の夜のうちに日記を書かなければ、寝かされなかったのが、子供達にはつらかったようです。

山頂にて昼食

第四回　昭和七年

二泊阿夫利神社等

川崎大師に参詣したが、自動車と人の洪水で動きが取れぬ程でした。名物のくず餅を食べ、夕方大山山麓に宿、翌早朝ケーブルで阿夫利神社に詣で、御祓いをして頂き、それから急坂を雪で喉をうるおしつつ登り、見晴台で持参のお屠蘇と御せち料理で祝い、熱海に宿、伊豆山神社、魚釣り等で休養しました。

第五回　昭和八年　二泊　御嶽神社等

奥多摩の御嶽神社神前に於て祈禱を受けて、氷川に宿。宿の丁寧な正月料理に一同喜びました。

翌日は日原の鐘乳洞見物、雪ですべる道を、往復三里は苦しかったのです。夜は炬燵をたおして畳をこがし宿屋に弁償した事を思い出します。

御嶽神社前の二又杉

第六回　昭和九年　富士浅間神社等

私は、厄年なので川崎大師にお詣りしお札を受け、

御殿場で、富士浅間神社を参拝し、河口湖畔に宿、翌日、湖水でスケートをしたところ、子供らは皆上手に滑り、私にもスケート靴をつけてくれましたが立つ事さえ出来ず笑われて、しゃくにさわりました。

第七回　昭和十年　一泊　箱根神社等

蓊蒼たる老樹の間を登り、小田原大雄山本殿にて祈禱をして頂きました。チャメの康彦が大きな下駄をはき、天狗のうちわを借りて持っている写真があります。箱根神社にても祈禱を受け芦の湖で沢山の水鳥をめでつつ湖尻から雪中行軍で大湧谷を見物して修善寺宿。翌日源氏の哀話や、江川太郎左衛門の溶鉱炉見物。

大雄山の天狗のうちわ

大湧谷噴火口

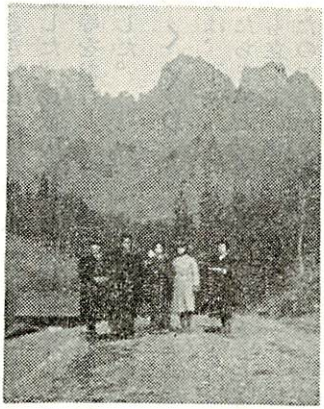
第八回　昭和十一年　南伊豆一泊

伊豆東海岸を南に下り峰温泉等を見て下加茂温泉宿下田ではペルリの寺、吉田松蔭のかくれた岩。石廊崎水神、其他古い社寺も参拝。

第九回　昭和十二年　一泊　妙義、榛名等

下仁田方面より登山、妙義神社々殿にて厳粛な祈禱をして頂きましたが、この時は最も感激が深かったのです。伊香保に行くべく松井田口に下山したのですが、途中から自動車を呼ぶため、康彦を先行させたところ、両方共、道に迷い三時間もまごまごして警察の御厄介になりました。何しろ山の奥だし、四十年も前なので大変でした。

駄菓子屋で休んで居た時、村の子供が紅生姜を買っ



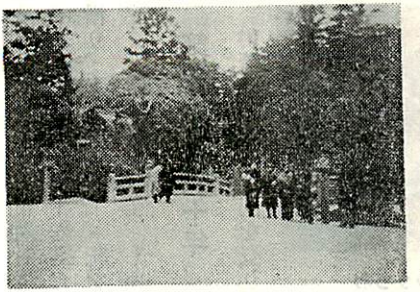
妙義山麓にて（下仁田口）

てお菓子がわりに食べているのを見て朝鮮の山奥にいるような感がしました。其日は夜おそく伊香保に着。翌日榛名湖を通り榛名神社に参拝したり、岩めぐりして、太田の呑了様に参拝し、裏の金山公園で写真をうつした処、まりえが欄干につかまり、角兵衛獅子のようにうしろ向きにそり返っている処がうつり傑作でした。

第十回　昭和十三年

大晦日より四泊　伊勢等

十年目の最後なので大晦日に出発し、伊勢山田に宿



伊勢神橋にて

↑危険な榛名岩の上にて

早朝二見浦の初日の出を拝し、持参のお屠蘇とおせち料理で十年間無事旅行し得たよろこびを祝し、内宮外宮、浅熊山、奈良の神社仏閣を拝し大阪に宿。文楽を見て京都見物をして京都に宿。翌日比叡山のケーブルの乗場近くで昼食をとりましたが、若鳥の水焚きと黒豆が大変おいしく其味が今だに忘れられません。其時煮かたを、おかみに聞きました処、四日もとろ火で煮、砂糖の加減等をきき京都だけあって、料理には苦心していると思いました。比叡山を拝して琵琶湖に下り、三井寺、石山寺等を参拝し、弁天島に宿、翌日船で釣りをして帰りました。

しめくくり

昭和三年頃は、子供二人両手につるして歩るけましたが、十年もたちますと、子供が皆リュックを背負いスケジュールも立てて、親は只あとをついて行けばよい迄に成長したのには驚く程です。

（邦彦二二才、さつき二十才、康彦十八才、まりえ十七才）幸い十年間、一人の不参者もなく、長男は戦争のため病にたおれたが、其の孫の宏之が、よく、本家を守って居ります。他の三人は現在、皆幸福な家庭をもっておりますことは、神仏の御加護によるものと、感謝しています。

私は「**子供は親の心を実演する名優である**」という言葉を信じて、身心共に成長盛りの子供に、十年間を神仏詣りをともにした事が、無駄ではなかったと思って心からよろこんでおります。

合　掌

印度附近の旅路

（其の七）　桐　江

アフガニスタンの国情

アフガニスタンは、峨峨たるヒンズークシ山脈を背にして、ソ連に接し、海のない二千米前後の高地で、砂漠と、草原の大変な国です。

人口二千五百万の九十％以上が、文盲であり、又家のない放牧の民が二〇％もおり、この国を旅行する者には何でも珍らしく、印象深いものが沢山あります。

併し一部は文化もすぐれています。それは道路は米国の援助で、実に立派だし、ダムや水路等で草原を沃野にする事はソ連の援助だし、機械工業等は独逸の資本技術を導入している等、たくみに大国を利用している事が上手ですが、大部分は原始的な生活をしている。

新旧混こうの貧乏国だとのことです。

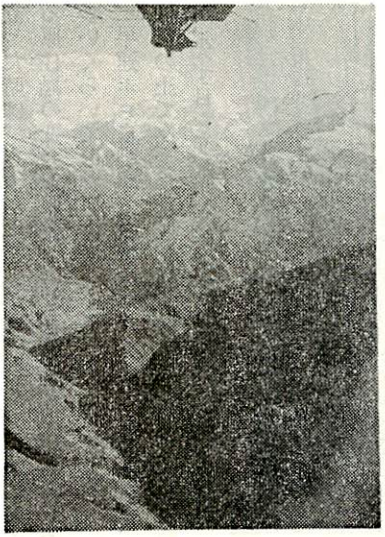
英国の進入

百年前ですが、英国が印度を征服した勢で、此の国を一のみにしようと、カイバル峠を越えて三回も進入したのですが、その度毎に撃退されました。殊に第二回目は数万の英軍を全滅してしまいました。

是は国王シーテールも偉人であり、国民も剽悍な山嶽民族で山嶽を利用しての、北ベトナムの様な得意なゲリラ戦で英軍を悩まし、独立を維持しえたとのことです。国王は日本魂を以て指導したことも有名な話です。その王城も今もって保存されています。

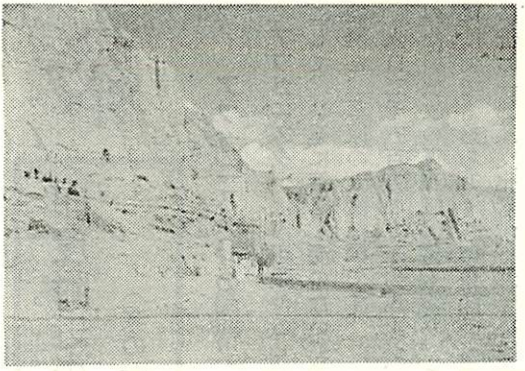
カイバル峠の嶺々には沢山望楼や其他戦場の跡などあって、当時の歴史を物語っております。

バーミヤンの石窟群



雪や氷河でおおわれたヒンズークシ山脈

十一月十二日、**ガンダーラ仏**で名高い、**バーミヤン**の岩窟群の見物に自動車で、行く予定でしたが、折よく十八人乗りの小型飛行機がチャーター出来たので、氷河や万年雪でおおわれた、ヒンズークシ山脈の上空を山すれすれにとびましたが、目の下には山嶽民族の集落が、谷間に点々として見え、僅か一時間でしたが、此の印象深い絶景に一同感激して、盛んに写真をパチパチやっておりました。

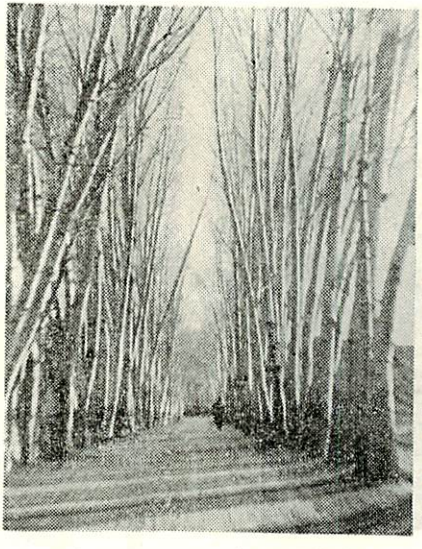


バーミヤンの岩窟群

殊に待望の四キロに及ぶ岩壁に掘られた無数の岩窟群が北方に見えた時は感激で胸迫るものがありました

二千六百米の高原の寒村バーミヤンの飛行場とは名ばかりで、砂漠の中に下り立った時は、さすがに寒さがはげしく、見物に来ている原住民の変った服装の中にも毛皮をつけている者が多いくらいでした。

早速ボロ自動車で白樺やポプラの大木の並木や、原住民の土で作った家並を通りぬけると、雄大な岩窟群が、先ず目をうばいます。此の岩窟にはいって見ると、僧房や、寺院等が皆廊下でつながっております。五十三米と三十米の大石仏や、三百米もある天然石の寝釈迦もあります。当時は近くに王城もあり数十の大寺院や、数千名の僧侶がいて、紀元六世紀頃迄小乗仏教がいん盛を極めた事は玄奘法師の西域記でも伺われます



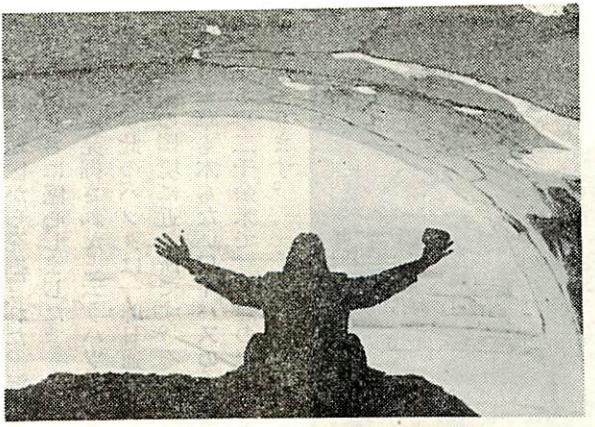
バーミヤンに行く白樺の並木道

処が愚像否定の回教の進略又はアレキサンダーや、モンゴル（蒙古）の大軍の残虐な進略により破壊しつくされて、さしもの緑の王城都市も砂漠の地下にねむり、岩窟に入ると仏像の安置されたと思われる処や、いろり等、当時の僧侶の生活の跡が僅かに哀れな歴史を物語っております。併し天井其他建築上学ぶべきものは沢山あります。此の国は中国、印度、欧州等の**シルクロード**の中心地的要路であるため、文化も進歩していたが、興亡のはげしかった国だけに、ペルシャ、トルコ、モンゴル、其他の諸民族の混血人種であり、日本人そっくりの住民にもよく出会いました。鉄道もない位な奥地の為、ラクダの隊商も今以て物資交流の唯一な交通機関として利用されています。

先ず**五十三米の大仏**（高崎観音四十三米）に近ずきますと、顔や足等は回教徒に破壊されていますが、千三百年前、玄奘法師が訪れた時は金色に輝やく華麗な大仏や、岩窟に圧倒され「よくぞ此処まで辿りついた、天笠は近い。この巨大な御仏の像のごとく、無限の力で廻り来る、此の真理を必死に学ぼう」と決心したと、書いてあることから、当時は雄大壮麗なものであったと思われます。

此の大仏の足元に近ずくと、さすがに威圧され思わず合掌し心経をくちずさみました。

私達数名の者が、此の五十三米の大仏の頭上に登りましたが、空気の稀薄なのと、冬着を沢山着込んでいるため、足に自信のある私も僅か五十数米登るのに、三回も休まねばなりませんでした。そして階段やトンネル等を登ると、大仏の頭上に達します。



五十三米の大仏の頭上より大雪山を望む

そこは十畳座敷位の広さがあり頭上は大きなアーチになっています。ここには回教の剣も及ばなかったと見え美しい色彩の画などがあざやかに残っていまして、壮厳美麗だった

当時を忍ぶことが出来ます。

この丸形の天井を通じて外の景色を眺めると、バーミヤンの高原をかこんで、白がいがいたるヒンズークシ雪山が実に美しく雄大で、神秘的な状景は心に刻まれて、忘れられがたく、今回の旅行中最も感激を深くした所です。四キロに渡る岩窟群も時間がないため、一部を見物しただけで、午後四時頃飛行機にのりパン等配給されたのですが、あまりにも絶景のため、左右の窓からあかず眺めてろくろく食事を取らぬうちに、カブールに帰ってしまいました。

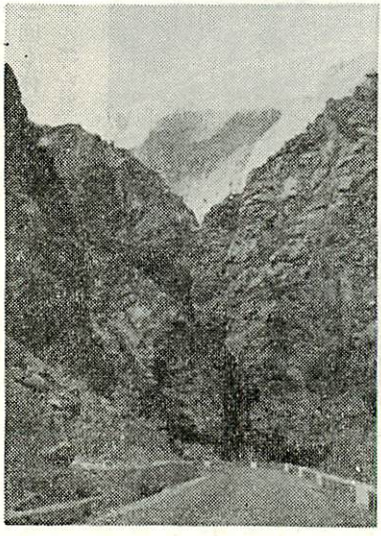
夕方カブール市内の古跡や珍らしい古代的なバザール等を見物しましたが、相変らずの学生デモにはばまれて、心落ちつかず駈足で通ったため夢を見ているような印章が残っているばかりです。

只印度大陸を征服した**バザール王**が、炎暑の時はカブールに避暑に帰った為、国民に親しまれたと云う王宮やお墓があり、銀杏のようにあざやかな黄色の延々たる街路樹の大木も印象に残っておりますが、回教国だけに婦人は少なく又顔をかくしております。

ハッタの古跡

十月十三日、午前十時迄、カブールの博物館等で、ガンダーラ地区から発掘された、沢山貴重な仏像や美術品の美しさに感心しました。

四年前に発掘されたと云う**ハッタ**の遺跡を見物に行きました。此のハッタは一昨日通過した、アフガニスタンの東の国境に近い所です。その時暗黒の中を無中で登った草も木もない**ワイバスの大渓谷**の絶景を眺めつつ下る事二千余米で、ソ連の資本による二ヶ所の大ダムがあります。

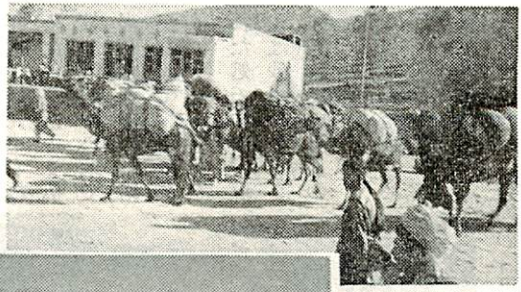


ワイバス渓谷

ジプシーの大家族

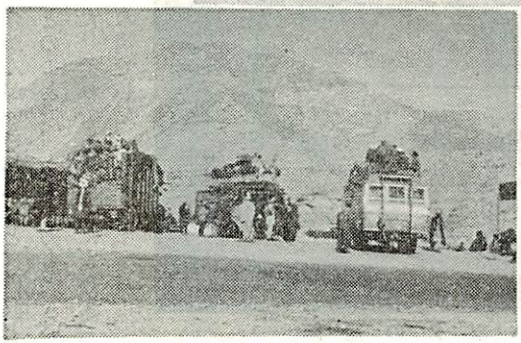
其処にタウン（食堂）があり、旅人が休んでいまして、その中にジプシーの一団が、五台の貨物自動車に

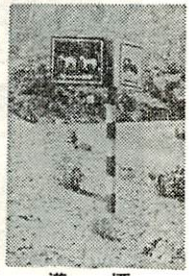
世帯道具から豚までのせている。三十余人の大家族が休んでいました。日本では全く想像もつかぬ、放浪の民の生活の様子を見る事が出来ましたが、社会のそく



→ ラクダの隊商キャラバン

移動するジプシーの大家族 ↓





導　標

ばくや、関税など心配する必要や、何のくったくもない生活の中に規律が始まり、楽しくなって、止められないそうです。

非常な暑さなので、室内で食事をしようと食堂にはいったところ、何とも云えぬ悪臭がして、胸がわるくなったので、すぐ逃げ出し道端の岩かげで炎暑をさけて弁当を開きました。

この悪臭は土民にはよい匂い位いの習慣になっているのでしょう。

ラクダの隊商

この道すがら見たいと思っていた。ラクダの隊商（キャラバン）に度々出会って、昔ながらのシルクロードを見ることが出来ました。道の道標も自動車道は自動車の絵で、シルクロードの道はラクダの絵が画いてあります。

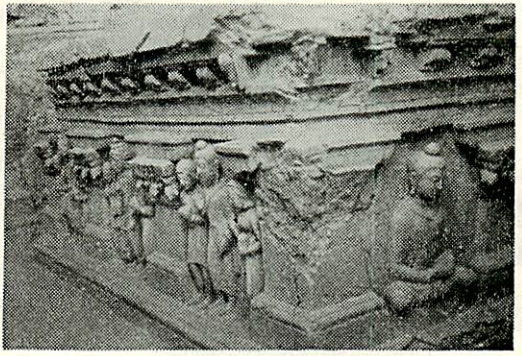
ハワダの遺跡

米国の資本で作ったと云う。美くしい街路樹の直線道路を一時間も東進すると小高い丘の上にある。ハワダの遺跡に到着します。

夏は五〇度にもなると云う砂漠も、ダムの水で農地

になっていますが、此のかんがいされた処と、砂漠とでは、四、五度も違うとのことで、人工の力も大きいなァ……と感心しました。それでも暑くてたまらず、名物のデカメロンが命の親でした。

ハワダは千数百年前、いん盛を極めたガンダーラ仏教地区の中心地で当時は沢山の堂塔があって、三蔵法師も熱心に巡礼された処ですが、現在は砂漠の中でうずもれているとのことです。ハワダは四年前発掘したばかりで、考古学者以外は訪ずれる人も少くなく、見物の許可も面倒だったし、番をしておる原住民も銃をもっていて物そうです。



ハツタの遺跡

発掘した場所にはそまつな屋根があるだけで、全く整理されておりませんが、沢山の卒婆塔の基段や、仁王様その他の仏様が沢山並んでおります。しかし上部は破損しておりますし、その附近には掘り出した彫刻のかけらが沢山散乱していて、拾っても何とも云いません。

今迄見た沢山の古跡では石一つ拾っても番人が一々文句を云う位に厳重なのですが、ここでは無関心でした。此の貴重な遺跡が整理されることを祈ってやみません。

此の丘から周囲を眺めますと、遺跡が地下で埋もれているような丘陵地帯が沢山ありますので、将来は一大古跡の名所になるでしょう。

この近くに古い回教寺院があるので見物に出かけました処、山嶽民族の部落を通るので、非常に危険だと役人に注意され、思い止まりましたが、全く附近で会う土人の眼光のするどいのには恐ろしさを愛じました。

帰路又例のワイバス渓谷を登るのですが大きな瀬を眺めつつ、デカメロンにのどをうるおしたその味は忘れられません。そして夜おそくカブールに帰りました。十四日カーブルに別れて、デリーに帰りました。

明日からは印度の南方を旅行するので、冬着全部をまとめて、日本に送り返す整理に半日を要しました。

以下次号

西遊記（其の十二）

岡部千三

悟空のかつやく

「よろしい。やくそくしたぞ」

法師がじゅもんをとき、ころもと頭巾をはずすと、悟空のくるしみは、けろりと直ってしまった。しかし、そのあとに、頭巾についていた金の輪がのこって、どうしても頭からはなれない。

そのために、こののちも悟空は頭をいたくして、いろいろくるしむことになる。

法師のなさけあるなだめに悟空はしたがった。

蛇殺山と云う山のふもとに、見たところ何のふしぎもない、ひとすじの川が流れていた。白馬にまたがった三蔵法師と孫悟空が、川にそって進んでいくと、ざざゝゝと、いきなり川の水がさわぎ立った。

ひひーん。

法師ののった白馬は、前足を高くあげて立ち、今にもかけ出そうとした。

「しっ、しっ、あばれるではない」と悟空が馬をなだめようとした時、川の水をはねとばして、五、六丈（一丈は約三メートル）もある竜がおどりでて、法師をひとのみにしようとした。

「おっと、あぶない。おししょうさま」

悟空は、法師をかかえて、小山の上にかけあがった。

「ぶれいな竜です。わたしがとっちめてまいります。おししょうさまは、しばらくここにおまちください」

こんなときには、なによりだいじな如意棒である。耳からするするとひきだして、悟空は、肩いからせて、川へ引き返していった。

「あっこれはどうしたのだろう」

あたりをみて、悟空はびっくりした。

そこには馬がいないのである。よくよく見ると、土に血が流れているではないか、かわいそうに竜につかまって、川の中へ引き込まれ、食われてしまったのだろうか。

「さては、竜とたたかったのだな。この悟空がいなかったのがわるかった。ゆるしてくれよなあ」

悟空は、心の中で馬にわびながら、

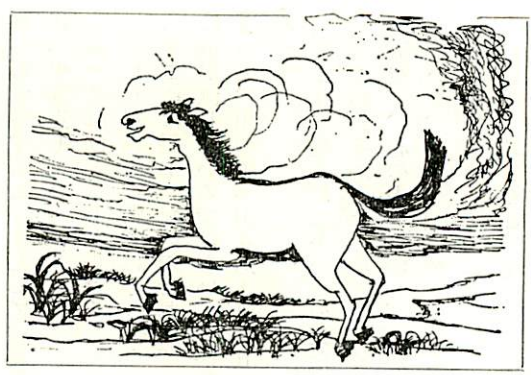
「やいっ、やいっ、竜め、でてこい。こんどはこのおれが相手をする。でてこい」

どしん、どしんと、足をふみならして、よべど、さ

けべど、竜はでてこない。
「よし、でてこないなら、こうしてやるぞ」
如意棒を長くのばして、さおのようにし、川の水をめちゃくちゃにかきまわした。
「どうだ、これでもでてこないか、いくじなし。小へびだって、もっと勇気はあるぞ」
悪口を云いながら、いつまでも水をかきまわしているうち、とうとう竜もたまらなくなったであろう。水の上に、ぽっかり頭をつき出して、
「うるさいなァさる。お前はゆるしてやろうと思ったが、いたずらがすぎるぞお前の仲間の馬のように、わしのえじきになりたいか」
それをきいた悟空、
「何をっ。お前こそ、ゆるしておけぬ、いたずらものだ」

悟空にいどみかかる竜

悟空は如意棒をふるって、竜をたたきふせようとうちかかったが、竜は、小蛇にすがたをかえて、ちょろ、ちょろ、と草の中へかくれるので、どうすることもできない。
「ひきょうな竜め、どこにいる。でてこい。こら」と、きょろきょろ、あちこちさがして見たが、小蛇はでてこない。
悟空はくやしがったり、あせったりしていると、
「悟空よ、あらそいはやめなさい」
きいたことのある声に、思わずハッとして、ふり返って、みると、観音さまが立っていらっしゃるではないか。
「あれれ。これは観音さま、いつのまにおいでござ


竜がかわった白馬

いましたか」
　悟空は心をうばわれて、きょとんとして、
「それにしても、ちょうどいいところでした。川からわるい竜がでて、おししょうさまの馬をつれていってしまったのです。かわいそうに、たべられてしまったのです。竜のやつをつかまえて、ひどいめにあわせてやらなくては気がすみません。どうぞ力をおかしください」
「おこるな、おこるな」と観音さまは、くすくすと、わらうのだった。
「その竜は、わたしがここへよこしておいたのだよ。あれはわたしのけらいなのだ。いちど白馬にしてためしてみたが、法師のくるまで、もとの竜にもどして、ここにまたしておいたのだよ」
「そんな、そんな、わけのわからないことがありますかい。あなたは、おししょうさまを、くるしめようとしていなさるのか」
「ちがう、ちがう。まあ、見ておるがよい」と云って、観音さまが何かじゅもんをとなえると、くさむらから、小蛇がはいだしてきた。
「竜よ、また、馬にかわれ」
　観音さまが、やなぎの葉で、小蛇の背中をなでると、小蛇は、たちまち白い馬になって、ひひーんと、元気よくたてがみをふった。
「悟空よ。三蔵法師を、この白馬にのせて、お前がともをしていくのだぞ」
「はい。成程、これはなかなかいい馬ですな、しかしおししょうさまの馬をくったのが気にいりません。どうも心のわるいやつのようです」
　すると、白馬は、歯をむきだして、
「さるめが、あまりえらそうなことを云うので、しゃくにさわったからです」
「なにをっ、わしのわるくちまで、いうのか。もうかんべんならん」
　悟空は、また如意棒をとりなおした。
「あらそってはいけない。わたしの云うことがきけないのか」
　観音さまは、白馬と悟空をしかりつけたので、悟空もしかたなく、あらそいをやめ、白馬をひいて、三蔵法師のところへもどって行った。
「おししょうさま、さっきの竜が、こんな馬になりました。これでも、観音さまのけらいだそうでございます」
「そうか。観音さまのおことばには、したがわなけれ

ばならない」
　法師は、白馬にのった。そして川を渡ろうとしたが、橋がない。こまっていると、そこへ水神が筏にのってきて、
「どうぞこの筏におのりください」と云って、むこう岸へわたしてくれた。
　白馬は足が早くて、悟空は、あとをついて行くのがたいへんだった。
「おい、竜の白馬、あんまりいそぐなよ」
　悟空は、うしろから、息を切らしてついていった。その夜は、一けんの寺を見つけて、とめてもらった。
　ところが、寺の坊さんは心のよくない人で、三蔵法師の**けさ**がほしくなり、夜ふけに、寺へ火をつけた。
　その火事のさわぎにまぎれて、けさをぬすむつもりだった。
「わっ、あつい。あつい」
　悟空が目をさましたとき、誰かが、風のように、火の中をくぐっていくのが見えた。
「あやしいやつ」と悟空は、あとをおいかけた。
　それは、黒風山の黒大王と云うくまのばけもので、坊さんがとろうとした法師のけさを、よこからうばってにげたのである。
　悟空は、どこまでもおいかけて、とうとう黒大王のすむ、黒風洞までおいかけてきた。
「そのけさ、とられてなるものか。かえせ、かえせ」
「とるなら、力づくでとって見ろ」
「おう、とるとも。この鉄棒のあじを見ろ」
　悟空と、黒大王とのあいだに、はげしいあらそいがおこった。黒大王は、黒い鉄棒、悟空は如意棒で、はげしくわたりあったが、
「えいっ、やっかいだ」と、悟空は、くるりととんぼがえりをうつと、ひとつぶの金丹にばけた。金丹は、ぱっと空中へはねあがり、するりと、黒大王の口の中にとびこんだ。
　黒大王の腹の中はまっくらで、なにも見えない。
「おそろしくくらいな。ろうそくはないか。なければあばれるぞ」
　如意棒を小さくして、腹のあちこちを、どしんどしんとつきはじめた。
「うっ、いたい、くるしい」
　黒大王は、鉄棒をなげ出し、両手で腹をかかえて、ばったりたおれた。
「黒大王、まいったか。悟空さまのうでまえは、こんなものだ」

悟空ははなからはい出して、けさをとりもどした。
腹の中で、悟空にあばれられた黒大王は、立ちあがる元気もなく、ぐったりとしていた。
「ついでに、こんなやつは、たたきつぶしてしまおう」と悟空が如意棒をふりあげて、いざ一うちと云うところへ、
「悟空よ、まて」と観音さまの声が、きこえてきた。
「おや、観音さまは、いつのまにおいでになったのです」
「わたしは、きたいと思えばいつでもくる。いきたいところへも行く」と云って観音さまはにっこりと、お笑いになった。
「この者のいのちをとってはならぬぞ。黒大玉は、わたしにまかせておいて、おまえは、早く三蔵法師のところへかえるがよい」
「あっそうだ。うっかりして、おししょうさまをわすれていた。すぐにかえります。けれど、この黒風洞は、またわるいやつが住みつくといけませんから、やいてしまいましょう」
こう云って、悟空は、黒風洞に火をつけた。
もえあがる赤いほのお、黒ぐろとあがる煙りをあとに、悟空は、きんと雲にとびのって、おおいそぎ、寺のやけあとに立って、しょんぼりしている法師のところへもどってきた。
「おししょうさま、宝もののけさをとりもどしてきました」と云って、うやうやしく、けさをさし出した。
「それはよかった。ごくろうだった。それにしても、このさわぎで、お前のはかまは、だいぶいたんでしまったようだ。さあ、これにはきかえるがよい。そして仕度がすんだら、いそいで出かけることにしよう」
法師と悟空は、また、旅にでた。
二つのかげぼうしをならべて、遠い西の国、天竺をめざして、いそいで行くのであった。
それから五、六日のあとのこと、三蔵法師と孫悟空は、小さな国の境にある、さびしい村にたどりついた。
日がくれかけて来たので、ある家に一夜の宿を乞おうとすると、その家の主人が出て来て、云うことに、
「せっかくのことだが、わたしの家には、おかしなばけものがおりますので、お宿するわけにはまいりません」
主人はまったく気の毒のような、こまった顔をして立っている。
「ばけものだって？……それはおもしろい。そのばけものをたいじしてやろうではないか」（以下次号）

壱万体観音奉納者芳名

第三集

十月末迄の御申込者

一、敬称は略させていただきます。

一、○印はA観音像奉納者。

一、間違がありましたらご連絡下さい。

住所	芳名
世田谷	滝口　泰子
横浜市	藤井　治子
板橋区	新井　ミチ
町田市	舘山　洋子
渋谷区	安達　武子
大宮市	新藤　明秀
練馬区	平沼弥太郎
	三百体
○北　区	高山　忠治
〃	佐藤　多禰
練馬区	二村　清一
〃	平山　明
〃	星　幸衛門
〃	竹内　光雄
品川区	重宗　雄三
	百体
行田市	加藤　義雄

住所	芳名
岩槻市	関根　昭三
大宮市	高橋　邦雄
〃	加藤　正美
〃	東　精治
中野区	小林昭三郎
○練馬区	鈴木真太郎
	拾壱体
熱海市	加藤　春造
与野市	武田　与一
蕨　市	徳丸　平一
浦和市	石坂謹之助
練馬区	中　猛
世田谷	平沼　浄
	拾体
府中市	岡田　園子
〃	野沢　照久
世田谷	牟田三枝子

住所	芳名
川崎市	大山　文子
世田谷	小林　義和
○〃	宮崎　芳子
○〃	斉藤寅次郎
川越市	磯貝　勝之
	拾体
○品川区	井田　英一
板橋区	千田儀一郎
大宮市	青木　常雄
世田谷	岡本忠一郎
浦和市	宮沢　善三
〃	岩田　和子
世田谷	松崎　紀光
千代田	森山　雅司
大宮市	飯沼　武勇
板橋区	宮本　義一
〃	小原六兵衛

住所	芳名
板橋区	斉藤　礼蔵
〃	冠城　孝一
〃	中坪英一郎
葛飾区	立石　公茂
与野市	村勢　一郎
足立区	古屋　勝章
新発田	大野　美宏
飯能市	田中　鎮次
浦和市	鈴木万太郎
狭山市	持田正次郎
〃	吉沢ショウ
○与野市	永田　武彦
○川越市	島村　源治
○新座市	吉田　国雄
○足立区	松井孝一郎
○渋谷区	渡辺倭文栄
○練馬区	山下　直衛
	参体

住所	芳名
○所沢市	大野　愛助
○足立区	堀口　錦治
所沢市	戸ヶ崎　実
与野市	八田　弘人
北本町	梅本　福雄
与野市	浅野　国松
大宮市	中村　栄治
〃	瀬田　兼治
熊谷市	大沢　金次
鶴ヶ島	峰岸　武次
大宮市	赤木　力男
浦和市	吉野　常吉
与野市	福島　完司
坂戸町	若松　志津
鴻巣市	森　正木
川島村	斉藤　賢吉
坂戸町	黒瀬　滝治
川越市	榎本　斌

住所	芳名
○蕨　市	大泉　昭道
○大宮市	佐藤　文一
与野市	横木　信幸
大宮市	田島　和
高崎市	上原　豊
〃	塩島　賢
与野市	小俣　茂
文京区	萩原　金蔵
浦和市	青山　富治
名栗村	佐野　重蔵
○川越市	中島　三吉
○飯能市	坂本　繁夫
○狭山市	田辺　茂男
飯能市	金子　倖三
狭山市	桜井　雄三
飯能市	山川　俊男
狭山市	新井　はま
〃	内田　万平

住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名
横浜市	長野英之助	草加市	中野　定義	北区	鈴木　正治	青梅市	久保　一二
町田市	義見まげの	東村山	向山　幸雄	板橋区	稲垣　丑勝	名栗村	町田仲太郎
飯能市	平沼　玉枝	名栗村	佐野　正助	港区	近藤　静子	〃	町田　義晴
〃	参体	福生町	堀口　雪子	〃	弐体	〃	竹沢　算富
飯能市	野口　家嗣	練馬区	笹生　弥生	札幌市	高田　富與	〃	島田　穆彦
〃	新井　広吉	大宮市	諏訪　典久	新宿区	宇田川きくい	〃	新井理一郎
新宿区	北島　賢司	名栗村	岡部　守正	三鷹市	新川　つる	〃	中村　清
府中市	内藤　透	八王子	内田　泰明	武蔵野	栗山　静子	〃	加藤　芳朗
〃	山本　衛	文京区	橋本　正勝	港区	森田トキ子	〃	島田　茂夫
武蔵野	関　寅雄	北葛飾	有田　浩吉	〃	弐体	〃	島田台一郎
名栗村	岡部健次郎	青梅市	清水　武	〃	今井　久子	〃	石井　富山
川口市	渡辺　惣蔵	〃	弐体	大田区	高橋　立	〃	中村　亀三
〃	永瀬　洋治	〃	清水　治雄	練馬区	高橋　チヨ	〃	浅見由之助
〃	大野　元美	〃	弐体	加須市	宇和野つぎ	〃	新井　光雄
〃	弐体	小金井	加藤　完	足立区	斉藤　昭	〃	新井　和吉
〃	中村徳三郎	川越市	川上善之助	名栗村	滝島文太郎	〃	新井　孟
台東区	中西　士郎	〃	熊本　潔	青梅市	市川　善一	〃	高橋　良助
蕨市	荻原金次郎	名栗村	小峰　政春	羽村町	宮沢庚子生	〃	平沼　茂雄
〃	中原　栄次	〃	町田　実	青梅市	岩浪　卯吉	〃	小南喜代三
川口市	中原　政次	加須市	宇和野柘植	福生町	田村　治平	杉並区	柳川　弥生
	弐体	飯能市	須田　高一	青梅市	杉浦　政雄	上尾市	町田　明

住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名
飯能市	島田　正次	飯能市	中村登三郎	〃	武本虎之助	〃	弐体
〃	間野　福治	〃	弐体	〃	岡部　幹雄	狭山市	早川　義信
所沢市	加藤　チヨ	〃	山崎　貞吉	銚子市	伊東　敏男	〃	武本虎之助
飯能市	前島　蓮	〃	前久保西吉	蕨市	大泉　秀道	飯能市	岡部　幹雄
〃	小沢　孝公	〃	嶋田　武男	〃	大泉　俊夫	〃	早川　義信
所沢市	酒井　たけ	〃	小林　重治	飯能市	市川　宗貞	〃	伊東　敏男
入間市	落合　英雄	〃	加藤　義市	〃	大河原喜雄	〃	大泉　秀道
飯能市	堀口初五郎	〃	江袋　利雄	〃	小林　真治	〃	大泉　俊夫
〃	田中　定治	〃	拾参体	〃	武居　藤吉	〃	市川　宗貞
名栗村	小峰　一男	〃	岡部　光祐	〃	山崎　貞吉	〃	大河原喜雄
鶴ヶ島	登坂　祐平	〃	桓田　辰蔵	〃	前久保西吉	〃	小林　真治
飯能市	黒沢仁太郎	〃	小島庄太郎	〃	嶋田　武男	〃	武居　藤吉
〃	渋谷　巌	〃	鴨下　孝一	〃	小林　重治	〃	山崎　貞吉
〃	加藤　隆司			〃	加藤　義市	〃	前久保西吉
世田谷	二宮　謙三			〃	江袋　利雄	〃	嶋田　武男
〃	弐体			〃	拾参体	〃	小林　重治
与野市	福田　忠秀			〃	岡部　光祐	〃	加藤　義市
名栗村	拾参体			〃	桓田　辰蔵	〃	江袋　利雄
小平市	岡部　光祐			〃	小島庄太郎	〃	拾参体
飯能市	鹿島　三郎			〃	鴨下　孝一	〃	岡部　光祐
	土屋　勇					〃	桓田　辰蔵
						〃	小島庄太郎
						〃	鴨下　孝一

住所	芳名
飯能市	太伴武之助
〃	安藤　寅造
〃	平沼　康夫
〃	久下梅治郎
〃	島崎　二郎
北足立	高橋利左右
飯能市	和田　清
〃	関口　三造
〃	大久保嘉助
〃	中村　好男
〃	本橋　元治
〃	梨木　三六
〃	大河原三治
〃	吉田　勇
千代田	三浦喜太郎
岐阜	渡辺　光輝
飯能市	新井　一郎
〃	築地　弘
川越市	有山　幸
〃	大野　寛
飯能市	松沢　慶一
大宮市	

住所	芳名
狭山市	宮岡　伴吉
豊島区	白井　み恵
入間市	前沢小重郎
〃	斉藤　金作
〃	杉山定太郎
〃	当摩　弥一
〃	水村武一郎
〃	市村　弐
〃	河村　正常
〃	宮下　ぎん
〃	桑田　愛三
〃	斉藤　てい
〃	千葉　登
〃	島崎　時治
〃	鈴木　裕治
〃	浅見　文蔵
〃	新井　あい
〃	木村　ふで
練馬区	岡部　錦子
飯能市	小峰　とめ
〃	清水　忠蔵

住所	芳名
日高町	
飯能市	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	

住所	芳名
新井松三郎	
柏崎　秀吉	
黒田　利平	
山川　佐	
原島　辰蔵	
原島　タケ	
原島　廸夫	
馬場　利一	
大野　宣園	
中野　重雄	
安藤　紀	
高野　久保	
中島　良平	
原　喜一	
安藤　英一	
西　長治	
鹿戸守之助	
山川弥十郎	
水野　定一	
安藤　久夫	
関根　良作	

住所	芳名
飯能市	
〃	
〃	
名栗村	
日高町	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	

住所	芳名
本橋　光一	
宮寺　勉蔵	
黒田　菊生	
岡部　静吉	
佐野　しず	
大森政次郎	
長谷川重造	
岡上　孝	
後藤　平吉	
比留間清次郎	
石井尊四郎	
清水　勇三	
後藤　竜男	
黒米芳太郎	
松田　偉	
比留間正治	
福島　恒治	
岡野　清	
森川　豊明	
松田　信一	
加藤　義久	

住所	芳名
日高町	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
〃	
入間市	
〃	

住所	芳名
駒井　和男	
大野　栄作	
関根　茂雄	
新堀　達三	
野村　浄	
川村太一郎	
石井　好一	
武田　友蔵	
金子　文夫	
新林　七朗	
武田　正章	
稲垣　広助	
小川郁次郎	
品川　誠三	
大野　光三	
中里　進	
小川　泰	
江沢　幸三	
吉田　富雄	
田代東三郎	
本橋　弥彦	

住所	芳名
入間市	林田正太郎
〃	小林　平一
所沢市	黒田　成次
能飯市	稲村　富
〃	天野　祐治
〃	本橋　十郎
〃	中村　実
〃	池田　喜助
〃	市川　喜三
〃	真野長太郎
〃	浅見　直三
〃	真野　政吉
〃	青木　正義
〃	土屋　幸作
〃	堀口　一男
〃	大野　穣
〃	木崎　新蔵
〃	吉田　保治
〃	加治　栄一
〃	本橋　正造
〃	鈴木　ます

住所	芳名
飯能市	鈴木　忠造
〃	本橋　恒輔
〃	馬場貞五郎
〃	細田　富治
〃	曽根　英二
〃	疋田金次郎
〃	倉掛　一男
〃	高野　忠
〃	石原　正平
〃	山川　喜一
〃	高野　幸康
〃	西村　仙蔵
〃	佐野　勘一
〃	町田　要行
〃	濱中亀三郎
〃	金沢　一郎
〃	森　喜一
〃	磯崎　幸造
〃	長谷川政吉
〃	谷合　金作
〃	佐野　太補

住所	芳名
世田谷	平沢　美夫
兵庫県	光山　善雄
大阪市	秦　昭巨
千代田	自動車販売（トヨタ）四百体
〃	神谷正太郎
〃	弐拾八体
〃	神谷志津江
〃	弐拾七体
世田谷	稲山　嘉寛
〃	稲山　参体
〃	稲山　つる
〃	稲山　参体
〃	稲山　繁孝
〃	稲山　弐体
〃	稲山　熙政
〃	稲山　孝英
大宮市	内山　昭二
川口市	中村　時周
〃	奈良健二郎
富山県	小島　賢道
新宿区	上田　一之

住所	芳名
兵庫県	森本　豊
杉並区	山田正二郎
大田区	赤羽　七六
品川区	平林　賢恵
三鷹市	野村　貞一
世田谷	小林　等
渋谷区	鷲見　保佑
青梅市	瀧口常右衛門
大田区	溝口　新次
横浜市	西沢　篤志
武蔵野	金子　珪亮
鎌倉市	鈴木　太郎
杉並区	池田俊一郎（大栄不動産代表）
中央区	桐木　光三
千代田	高橋　つね
〃	高橋　二平
中野区	竹内　直孝
名栗村	塩野　まつ
〃	荻野　みつ
〃	塩野　しげ

住所	芳名
名栗村	小沢　治雄
飯能市	小室　敏一
〃	佐野卯三郎
〃	加藤　音治
入間市	西久保太郎
〃	加藤　薫
日高町	横田　辨明
〃	石井　宗平
〃	新　武平
〃	金子佐四郎
〃	大沢　正平
〃	新井　正久
〃	加藤　忠夫
〃	堀口久太郎
〃	宇津木真三
〃	清水　菊次
〃	加藤　英恭
〃	長沢泉一郎
〃	山口粂次郎
〃	新井　定重
〃	加藤　博

住所	芳名
日高町	青木　白
〃	清水　重雄
〃	大沢　正男
〃	関口　由造
〃	新井　次人
〃	清水　菊治
〃	椎橋　茂治
〃	加藤　隆
〃	関口　利一
〃	大川戸　清
〃	岡野　三平
〃	岡田　千三
〃	山崎　啓一
〃	西村　幸平
東松山	山口　敏夫
坂戸町	平田芳太郎
川越市	戸田　俊吉
所沢市	萩野　光男
狭山市	岸野　七郎
入間市	橋本　要
豊島区	田中シメ子

住所	芳名
豊島区	高橋　昭八
北　区	高橋　正二
練馬区	小林　充
板橋区	高橋　義仙
入間市	勝田　加一
日高町	石井　幸平
昭島市	北瀬　昭一
狭山市	吉田　康司
毛呂山	平野　国三

合計（第三集）　一、四四七

内訳　A　一七一

B　一、二七六

累計　三、三二二

内訳　A　六〇五

B　二、七一七

以下次号

壱万体観音奉納申し込み用紙

A B 区分	供養霊位（何々家祖先代々又は御戒名）	御住所	御芳名

号数

取扱者

建立中の救世大観音の体内及堂宇内に、壱万体の観音像奉安をおねがい申し上げましたところ、広く有縁の方々から三千三百余体のお申し込みに預りました。定めしこれらの祖霊は観音の偉大な功徳のお力に守られ極楽の喜びをお受けなさることと存じます。何卒この浄業が達成するようご勧進申し上げます。

永代供養料　観音像　A（三三糎）五千円　B（二五、五糎）三千円

御払込次第御仏壇用小観音（一八、八糎）を御送り申し上げます。

御払込先　埼玉銀行名栗支店　又は　埼玉銀行練馬支店

御申込書送り先　鳥居観音　埼玉県入間郡名栗村　電話　〇四二九七〇四　名栗二七五番

同　鳥居観音東京事務所　練馬区小竹町一ノ五二　平沼方　電話　九五五・〇四六五番

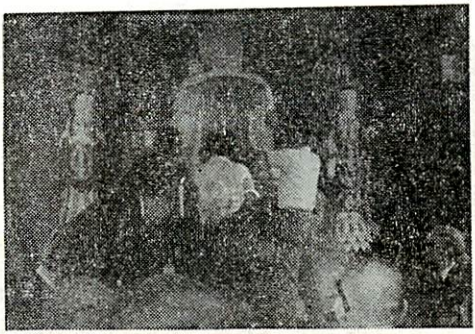
御一名様で観音像を何体申し込まれても差支えありません。

切……り……と……り……線

阿弥陀如来胎内納経式

九月五日、江古田のアトリエで、阿弥陀如来（総高十・八尺）の胎内納経式が執行されました。御導師は兵庫県正中寺住職、光山善雄老師で、写経して下された五十数名の善男善女御参列のもとに、厳粛に取り行われました。胎内壁面には、縁起や書画を書いて頂いたり、参列の方々に御署名をして頂きました。又胎内には写経や将来珍らしいと思われる本、其の他数十点が納められたが、皆納経式が初めてなので、珍らしい行事に感激して居られました。

昼食後、光山老師の御法話や、三信工業製作の救世大観音建立の工事経過の映写がありました。



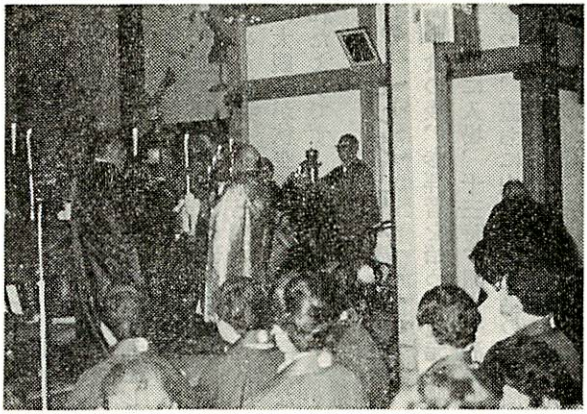
阿弥陀如来　観世音菩薩　勢至菩薩

開山三十周年記念祭盛大に終る

本堂、三蔵塔に於ける法要

十一月七日、秋色全山に深まった、白雲山は、この日快晴で、暖かい日和に恵まれましたのは、全く観音の利益と、篤信者各位の厚い信仰心によるものと、感激を深くしました。

午前十時より、名栗梅花講員三十余名の奉



本堂に於ける法要

三蔵塔前の法要

センター広間の舞踊公演

あふれ、内と外でお焼香をお願いしました。

十時三十分より、参列者全員三蔵塔前庭に参集されて、法要が進められました。

詠に始まり、御導師山田霊林先生によって法要がおごそかに執行されました。この間参列者各位の光彩は堂にたが、読経にしたがって、それぞれに香をお持ちになって、塔前の大香爐にささげられると、香煙はゆるく三蔵塔をめぐり、紫雲棚引いて、そのうつくしさは、実に荘観で、一同感動しておられました。

この後は、中食まで一時間程間がありましたので、目下建立中の救世大観音の現地と、山内の丁度色づき初めた紅葉を、そぞろに探勝していただきました。殊に大観音が秋空高く浮き立った巨大な姿にはおどろかれたようです。

センターでの講演と演芸

中食の後、参拝者を始め、地元一般が観世音センター広間に入場、十三時、開祖平沼先生のごあいさつがあって、直ちに山田霊林先生のご講演に移りましたが、一時間半にわたって、大衆はまんじりともせず、拝聴しました。

是が終ると余興として、榊原舞踊学園の東南アジヤ各国の舞踊が開演されました。実に美しくすぐれた演技には一同うっとりしました。最後に当山役員の町田仲太郎氏から鳥居観音の万才三唱と、平沼先生から来賓各位の万才があって、日程は終了しましたが、一同たのしく、一層仏縁を深められて、散会されました。

謹賀新年

観音大話世救世人
（順はいろは）

鳥居観音役員
元講同

石橋湛山
石坂泰三
岩本勝俊
飯塚孝司
市川宗貞
井原隆一
井上竹吉
石川求助
井野雅史
今津政雄
井上正雄
石原昂
池谷頼緒
原田愛助
服部雄次
橋本昇
新妻治郎
西尾右三郎
細田修三
時田穀三郎
千葉三郎
大野元美

大川鉄雄
大沢雄一
大泉寛三
大森とき
大野伝十郎
小佐野賢治
小川昌雄
小野田忠
岡部由次郎
岡部千三
若林五郎
渡辺綱雄
若松正数
神谷正太郎
梶谷真一
粕谷と志
吉崎弘
横川一郎
吉田仙太郎
竹村吉右衛門
武居藤吉
田辺留次郎

田島伝治
武田茂男
竹井博友
辰野彦一
相台宗次郎
長島恭助
中里勇吉
内藤豊次
並木たけ
内田桂一郎
右近保太郎
宇和野拓植
内田菊代
植竹真三
野口重雄
野本栄治
栗原浩
黒田利平
黒川倉好
山口友作
山本スギ
山脇元助

山崎嘉七
山口貴美子
山岸トリ
山崎完
俣野健輔
松下幸之助
松平忠晃
松本忠太郎
松下愛吉
前田増三
前田安彦
町田仲太郎
船口暉子
藤森賢三
福士勝男
金剛秀一
小林英三
小糸源六郎
小池清
後藤平吉
小林貞治
小峰久治

枝久保亀之助
秋本平十郎
浅見寅雄
荒井モト
沢田政広
佐野友二
佐野正助
斉藤新作
斉藤定二
喜代永政雄
木邨寅一
桐木光三
菊池仁
木村源兵衛
宮沢庚子生
宮前進
重宗雄三
下世古三雄
島田卓弥
清水谷恭順
塩入亮忠
白水敬山

下中邦彦
平岡文夫
平井敏治
平沼弥太郎
平沼とみ
平沼浄
平沼杉之助
平沼玉枝
平沼寛一郎
平沼幸一
平沼清儀
平沼康彦
平沼宏之
森正雄
関柢二
藤沢帝
鈴木すゑよ
鈴木嘉三
杉山慎
鈴木国仁
篠秀雄

春の行事のお知らせ

一月一日～七日、新年祈禱会、午前十時より本堂、年内にお受けしたものを一日に、執行いたします。以後は随時、受付けます。

種類、家内安全、交通安全、安産、商売繁昌、試験合格、傷病平癒

祈禱料　三百円、五百円、七百円、千円

遠方の方は、郵便受付で、郵送いたします。

一月十　七日　月例法要、観音経読誦会（毎月）

二月　三　日　節分会　午後三時執行

ご参拝の方に福豆をさし上げます。

二月十　五日　釈尊涅槃会　午後一時、本堂

三月二十三日　春彼岸法要、念仏会

花のお知らせ（三月から五月）

沈丁花と梅の花、本堂と、庫裡の附近、山麓にかけて、よい香りが漂い春のさきがけを感じます。

つつじ　四月中旬から、三ツ葉つつじが咲き始め、白雲山の新緑の間は花で綴られます。

それに続いて紅のつつじや紅どうだんが咲き五月半ばまで真赤な花が燃えるようです。

五月中旬に本堂入口の藤の花がうつくしくなります。

観世音センターのご案内

正月から二月末まで、左記のような料理で、奉仕をいたします。ご家族連れで、レジャーをおたのしみにその他のご会合に、ぜひお越しくださいませ。

○定食料理

一、入場料を含めて　代金七百円

一、内容　川ます塩焼、ご飯、おわん、香のもの、酢のもの、揚もの（わかさぎ）お酒一本又はジュース

川瀬の音をききながら風呂にも浴せます。

鳥居観音のしおり　第十七号
発行日　昭和四十五年十一月一日毎号定価弐拾円
編集兼発行人　埼玉県入間郡名栗村鳥居観音　部岡千三
印刷所　浦和市仲町二-八-一五　武州印刷株式会社
発行所　鳥居観音　電話〇四二九七〇四（二七五番）
〃　（五番）
鳥居観音東京事務所
東京都練馬区小竹町一ノ五二　電話（九五五）〇四六五

白雲山 鳥居観音 観世音センター案内図

足場の取れた救世観音
白雲山鳥居観音